おはようございます、こんにちは、こんばんは。みんなが集えるミニコミ誌「みんつど」のお時間です。いやー、梅雨ですねえ。じめじめしてなんだかお出かけするのもつらい季節です。紙面はカラッといきたいもの。今号はお待たせ！？　精神疾患を持つ支援者必見の企画「母のレスキューストーリー」です。

# 天地の母・はるみのレスキューストーリー

わたしの母はるみ（８３）が、息子・ひろゆき（天地成行）＝（４９）＝の数々の奇行に際し、何を思い考え、レスキューに奔走し、受容し、感じ入り、変わらぬ愛情を注いできたかが少し垣間見える！？　ヒストリー研究をはじめます。まず初回は、「わたしは山頭火！？」（くるとん出版）で特に目立つ奇行の代表であります、「２４時間サンダルマラソン」です。その時、彼女は……。

## 最初の奇行・２４時間サンダルマラソン

## 「腹をくくった」

２０１４年６月１２日。８月をもって退職して一年半の傷病手当金が切れ、障害年金に切り替えるかという時期であった。失業手当ももらえる手はずはしていたが、もう働ける体と心の状態にないという一番駄目な時期だった。

一方、はるみ「この頃までの１０年間、東京・両国の１Ｋに二人でいて、鬱がつづいていたんよね。わたしもそれでひとりでどこかに行くことも基本できなかったし。それで会社をやめてから一年くらいの時には、よく家から出て少しうれしくなったのよ。でもあんたの場合は、それがとてつもない『そう』状態になるとは、この時はまったくわからなかった。それがどれほど我が家に恐怖をもたらしたかもね（笑）そうは、鬱から抜け出せて、あんたは『ストレスが鬱のようではなく、気持ちが楽だ』と言っていたわ。でも死ぬ覚悟になっちゃったことにもつながるのね」（※以後、天地は脳の回転が著書執筆時やＳＮＳ利用時などでそうに）

朝にサンダルで宇部までかけたわたし。１４円しかない中で家に電話する。たしか午後の早めの時間。

わたし「いま、長沢池にいる。宇部から歩いてる。父ちゃんに迎えにこさせて。１０円しかないから切る」（ガチャ）

はるみ「どういうことなん？　ひろ、ひろ！　あら、切れた」

はるみ「父ちゃん、兄ちゃん。ひろを車で迎えにいって。わたしは家でなにかあったらいけんけ待機する」

しかし、長沢池には、レストランや温泉があるパーキング（ここにいた）と、父がいったのはコンビニとゴルフ練習場があるとこ。

結果、会えず（がーん）

ここまでは書いたんです、本に。ここからです。

はるみ「まいったまいった。また連絡を待とう。なんとかなる」

腹をくくったといいます。

翌日朝に、防府市富海の駐在さんで３００円を借りたわたし、家に照会の電話をかけるも、そのとき誰も出なかったため出発し、一番近くの国道２号線沿いのバス停にいたら待ち時間が長くて、もう一つ先のバス停まで歩きました。駐在さんが実は、そのバス停に後で来られたらしいんです。その後で、家に連絡がついたらしいのでした。しかしそのころわたしはコンビニで一本目の「ガリガリ君ソーダ」を次のバス停でぺろぺろしてました。そして、その日の午後に、サンダルで足の皮が真っ黒ではがれたわたしは家に着いて、はるみさんは「やれやれ」と思ったそうである。

とにかく

「この子は、とにかく言ってもきかないんじゃ。失敗しても本人の気の済むようにやらせんといけんようじゃ」

これだけは確信するようになったそう

これが、母はるみさんの後の天地成行への受容の核たる部分であるそうです。

さらに今回の取材中

はるみ「あんた、歩いているときには何を考えとるんかいね？」

と逆取材

# 親ですら分からない息子の二面性

## 「もう一人で背負わないでほしい」

わたし「そうだね、今思うと本当に、何も考えてない。自分の気持ちに逆らわず、でも、それはどうなるかも読めない。自分をすべて足が向く方に自分の身体を捧げているから、倒れることも死ぬこともなんもそのときはこわくなかった。飲み物も飲まず、食う事も忘れ、たばこも吸わず、足が痛くても歩き、疲れたら道に横になり、、、よくわかんないや。なりゆきに身を任せていたね」

はるみ「あんたは基本、次男だから世話を焼かせる甘えな子。だけど、念というか思いがものすごい強い子なんよね。普段はものすごいほわーんと優しい子なんだけど、一変して、圧がものすごいと感じる時があるわ。こういうことがあんたを追い込んで厳しい一面を作ったのかしらね」

わたし「そういうとたぶん母ちゃんの知らない一面の話だね。学生時代はまだまだ甘かった。社会人になって、都会での暮らしや向いていない細かい仕事をして、都会にいることに疲れない人やマスコミの仕事に向いている人に比べ、何倍も疲れながら言いたいことを極力控えていたし、また女性関係も遠距離だったり、文化が違うアルメニア人とデートしたり、朝鮮族の中国人の子と同棲していたり、とそれぞれに視線をその相手方にあわせすぎたことがやはり自分を見失う結果、つまり発病につながっていったのかと２０年以上経って思うんよね」

はるみ「ボランティアをやってきたことで、あんたにとって人間関係で相手の気持ちになることができるから、良い影響も多かっただろうけどねえ。あんたは何もせんでいいのに、他人に優しすぎるのもねえ、、、みんなそれが当たり前と思っちゃうから、だから今でもあんたのことは私でも理解できんことが多いんよ。『大丈夫だろうから、これもお願いって』言っちゃう。だけど、あんたにはそれが既にキツイんよね。それは他人様はなお気づかれないことでしょう。だから、これから気をつけなさいよ。もう我慢はしたらいけんよ。背負うだけ背負って、あんたが入院するのはもう耐えられないから、母ちゃん」　（つづく）

---

# メモリアル近しく感想・意見

### （みんつどを長く応援して）

こんばんは、おはようございます、こんにちは。わたしが何号か忘れましたが、雪の中千円拾った話しが天地さんの手にかかり超短編小説になったのは驚きました。（天地注：もしかしたら彼とのメールでのやりとりでの話かもしれません。エピソードを取材していたことを思い出しました）

最近の出来事（５月２５日）友達と光市に遊びに行き、昼は1週間前オープンした店（メンチの鉄人。肉とカレーのお店マイティ）に行き１１時の開店前に着いたので、店の外に置いてあるテーブルでオバサンと世間話をしてました。帰りにオバサンが外で食べてたので○○さん？　と聞くと３５年前の彼女でした。「私をもてあそんで捨てるつもりでしょう」と言われた事もありました。自分と別れて見合いして男の子を産んで離婚したとの事でした。「歳とりましたね」とかいろいろ話して「気を付けて帰ってね」と別れた、と言う事がありました。これも小説風にできるかもです。「あなたも小説家？」でよろしくお願いします。

**（周南市・Ｔさん）**

### （４７号を読んでひとこと）

４７号読みました。私の家は農家なので、私が小さい頃には、家に牛がいたり、ニワトリがいたり、そして、ヤギもいました。

名前を「メー子」といいます。なんとも安直な名付けです。

私は小さいながら、メー子が草をたくさん食べた後そこらじゅうに小さな黒い豆のようなウンチをするのを不思議な感じでみていました。

そのウンチが、その頃よく食べていた干しブドウにそっくりだったからです。さすがに、それを口にすることはありませんでしたが……。

私は、メー子の乳で大きくなったと言っても過言ではありません。

でも、２度と飲みたくないくらい、濃すぎて美味しくなかったです。

たわいもないことを書きました。たわいもないことを思い出させてくれて、ほのぼのとした気分にさせてくれるそんな「みんつど」はステキだし、続けるべきだと思います。

**（岩国市・株式会社くるとん　藤井康弘さん）**

みんつど
第48号
編集・株式会社